

Hemingway の独自性と限界

—思考作用の停止をめぐる—

英米文学教室 岡 村 俊 明

Hemingway の小説の多くは、単純な接続詞で結合された出来事の継起から成立しており、余分な説明・解釈や心理描写を殆んど持たない。簡潔性を旨としているといっても過言ではない。また戦争と闘牛、釣魚と狩猟、死と性という圧倒的な対象に、登場人物は自ら没入し、感覚と行動以外の他の要素の介在を容易に許さず、思考の余地ない状況下に生存する。その状況下で彼等が思考にのめりこむ機会が生まれることもあるが、感覚作用のバネが自動的に作用するなどして、彼等の思考作用は再三にわたり停止させられる。

その思考作用の構造・意義の解明は、Hemingway の独自性の理解に資すると同時に、彼の限界をも浮彫りにすると思われる。

1

Ernest Hemingway (1899—1961) が書いた数多くの作品は、晩年になるにつれて、いよいよ直線的にのびる一本の太い河の流れの如きものである。極端に異質な作品・支流は生まれていない。水源は一連の「ニック・アダムス物語」であり、河口近辺の静謐な流れは *The Old Man and the Sea* である。しかし多少の蛇行点・転回点があるが、思考作用の中止の観点からいえば、*A Farewell to Arms* が、良きにつけ悪きにつけ、源流と河口を雑然としたかたちで包含している。この論考では、*A Farewell to Arms* を軸に、各時代を画する代表作を前後にすえ、Hemingway の作品を思考作用の中止に関して考究してみたい。

A Farewell to Arms (1929) について。この作では、登場人物が思考にのめりこもうとする瞬間、“Don't think”, “Stop it”等の表現と同時に、彼等の思考作用は中断される。この論考ではそれらを考察の対象にしたが、同時に“Don't say”, “Don't talk”等の表現も、一種の思考作用の停止と見做している。これらはことごとく verbal level での思考作用の停止であるが、“Don't think”等と明言されていないにかかわらず、それが起因となり生まれた表現、いわば non-verbal の思考作用の停止の文もある。

思考作用の停止に起因する non-verbal の文は、作中に瀰漫している。その代表例を紹介しよう。追撃砲が宿舎に命中し、そこに居合せた Henry は傷を負い、救急車で運ばれる。その途上、担架に寝かされた彼の真上にいる兵士の傷口から、血が吹き出す。その血ははやく、または遅く、あるいは

は止まりまたどっと流れる。その描出は非情かつ詳細になされている。その直後に

“He’s dead I think,” I said.

The drops fell very slowly, as they fall from an icicle after the sun had gone. It was cold in the car in the night as the road climbed.¹

と描かれているが、はなはだ簡潔かつ無関心の体である。人間の死に臨んでも、“At the post on the top they took the stretcher out and put another in and we went on.”²と、兵士たちは日常の業務をはたすように淡々としており、また場面も章も直ちに改まる。これが一種の筆の押えとなり、乾いたタッチの背後へ読者を誘い、物思わせる効果をもつ。

この表現の特質は、異常な事件に呑みこまれても、作者は余分な感情的修飾語を一切排除し、事実を伝達する必要最少限の言葉のみを使用し、登場人物に余計な感情や思考の余地をなくし、むしろその作用を中断させる、その結果この乾いた文体が生まれ、同時に彼等がその事件にコメントする余裕もなく、直ちに場面が変転することである。こういう特質をもつが、non-verbal なそれへの論究はテーマのはなはだしい拡散を惹起するため、verbal level の思考作用の停止と比較検討するさいに限って、考察の対象とする。まずこの種の思考作用の中止を、第一範疇と分類したい。

次に verbal level の思考作用の中止に論を進めよう。Rinaldi は Henry と次の如き会話を交わす。

“All summer and all fall I’ve operated. I work all the time. I do everybody’s work. All the hard ones they leave to me. By God, baby, I am becoming a lovely surgeon.”

“That sounds better.”

“I never think. No, by God, I don’t think; I operate.”³

ここで Rinaldi は医者としてただただ手術に没頭している。彼はその業務を強い使命感にかられて必らずしも果していないが、その意義を考える暇もないほど多忙である。従ってこの種の思考作用の停止は、後出する範疇に比して、いまだ明確な像を結ばず、また比較的単純な層をその基盤にもつている。これが第二範疇である。

思考の停止は、思考を生む表現行為の停止にも通じる。好例を以下に引用する。

“So you make progress with Miss Barkley?”

“We are friends.”

“You have that pleasant air of a dog in heat.”

I did not understand the word.

“Of a what?”

He explained.

“You,” I said, “have that pleasant air of a dog who—”

“Stop it,” he said. “In a little while we would say insulting things.” He laughed.⁴

さかりのついた犬と揶揄された Henry は、一瞬わが耳を疑いながらも問い返すが、Rinaldi に最後

まで言わせない。友人関係を維持するためにも、究極的誹謗、あるいはショッキングな実相は忌避させ、人間としての一線は是が非でも堅持するよう Henry は要請するが、それが“Stop it”となって表明されている。究極的「判断作用」⁵を忌避する例を、第三範疇と分類したい。

第四範疇のそれは、この作品で最も繁出し、また重要度が高いため、焦点をあてて論を進めたい。

I could remember Catherine but I knew I would get crazy if I thought about her when I was not sure yet I would see her, so I would not think about her.⁶

上の引用の思考作用の中断は、狂気を忌避する目当てを持つ。その中断の直後の“Crazy”, “Don’t worry”の繁出がこの間の事情を物語っている。思考は、その作用を一旦停止し人々の狂気を忌避しても、場面が改まると、人々は忍耐の限度を飛び越え、ともすれば狂気の谷へ落下せんとするが、再度の中止を通じて、彼等の神経を宥め、緩和する。懊悩を減じさせ、狂気を忌避することは、つかのまなりとも、幸福を促えようとする彼等の姿勢に通ずる。“Oh let’s not talk about it. Let’s be happy.”⁷等の表現が端的にそれを語っている。思考作用の停止は、蟻の比喩で如実に呈示されている如く、濃いニヒリズムの影を背負っている。丸太に張り付いている蟻も、激しく燃え始める火を前にして、端へ端へと逃げまどい、ついに火中に落ち、死ぬ。⁸ 不可避的に死は襲来する。この不可避性が人々に取りつき、離れない。しばしの幸福に酔いしれている Catherine は、妊娠にふと気付く。途端に彼女は“trapped”⁹されたと感じるがごときである。愛し合う二人の恋人の縁辺に絶えず垂れ籠めている死の影が、この言葉を吐かせたといえよう。不可避とは知りつつも、たえず死を忌避し、忘却しようとする心持が、この作品に最も特色的な思考作用の停止であり、その作用は片時なりとも、その影を追いやる行動となる。次の引用

I was not made to think. I was made to eat. My God, yes. Eat and drink and sleep with Catherine.¹⁰

に示現されている如く、思考作用の中止は、食べ、飲み、眠る行動と結合する。おりあれば飲食を恣にする人々の性癖は、生理的要求以上に、この心持が顕在化したものである。cognac, brandy, vermouth, wine 等の多種の酒名が言及され、“Wine is a grand thing. It makes you forget all the bad.”¹¹ および“This war is terrible,” Rinaldi said. “Come on. We’ll both get drunk and be cheerful.”¹² が人々の飲酒癖の基盤にある。ひたひたと寄せくる死の影。追い払い忘却させる行動こそ、飲酒であり、また食事であり、睡眠である。

火中に落下して燃えつきる運命にある蟻も、瞬時なりとも安全な場をまさぐり逃げまどうように、思考の停止は、Hemingway の特色たる一種の行動・逃亡のテーマを随伴させる。逃亡は生を求めるあがきともいえる。Henry は戦場からの脱逃を図り、Catherine と手を携えスイスへ逃げのびる。自身の悪い予感が的中し、Catherine は産褥の床で息絶える。今やことごとく希望が断ち切られた Henry は、茫然自失しつつも、病院をあとにしてホテルへ歩いていく。

第四範疇の思考作用の停止は、Catherine や Rinaldi に比して圧倒的に Henry に多い。Henryこそ主人公である事情とは別に、彼は他の二人とは異種な思考をその特質としているためである。その間の事情を次に考察しよう。

イギリス人 Catherine はイタリア軍に身を投じ、従軍看護婦として参戦している。彼女を参戦に駆りたてたものは、刀傷を受け、また上背部に銃傷を負った婚約者を介抱することであった。“Something picturesque” と自ら認知せざるを得ないわけである。しかしどうあれ彼女なりの理由を持っており、強制的に兵役に服する自国の軍人とは異なり、他国の軍隊に身を投ずるには、人々は無論理由を必要としよう。それにひきかえアメリカ人 Henry はとりたてて持っていない。

“You’re the American in the Italian army?” she asked.

“Yes, ma’m.”

“How did you happen to do that? Why didn’t you join up with us?”

“I don’t know,” I said. “Could I join now?”

“I’m afraid not now. Tell me. Why did you join up with the Italians?”

“I was in Italy,” I said, “and I spoke Italian.”¹³

この引用は、自からの意志で参戦した Henry に、Catherine が尋ねるくだりである。Henry はその理由を深く考えない。あるいは説明を加えると、それは実相からスルリとすべり落ちると知っている。両者の思考の特質は異なっているが、次の会話は更に明瞭にそれを示している。

“I don’t know,” I said. “There isn’t always an explanation for everything.”

“Oh, isn’t there? I was brought up to think there was.”

“That’s awfully nice.”

“Do we have to go on and talk this way?”¹⁴

理由を求めて初めて安堵する Catherine と異なり、Henry は理由が真相を剔出するとは思わない。かといってさらに明言するでなく、それ以上説明も加えず、関心を示す素振りも見せない。これが Henry の特質である。Henry に Rinaldi を突き合わせると、Henry の思考の特質は一際瞭然とする。Rinaldi はとことん突きつめて考え、あるいは説明を加える。彼は Henry と Catherine の交情を抉り出し、さらに言明せずにはおれない。この意味で Rinaldi は “snake of the reason”¹⁵ である。二人の親交が堅持されるためには、“Please shut up” と Henry は Rinaldi の口を塞がねばならない。その直後二人は次のような話を交わす。

“You are better when you don’t think so deeply.” I said.

“I love you, baby,” he said. “You puncture me when I become a great Italian thinker.

But I know many things I can’t say. I know more than you.”¹⁶

Henry は彼に思考作用の停止を促がしている。Rinaldi は Catherine と異なり、“sentimental” でも “picturesque” でもない。彼は思考の停止をするのはまれで、腐臭のただよう暗部を剔出し、情容赦なく白日のもとにさらそうとする。その暗部を認知しながらも、無関心を装い放任することは、スムーズな人間関係に要請される時もあるものだ。少くとも Henry はそれを実感している。掌握した実相を、思考や表現で緩和させることを知らない Rinaldi は、戦争への恐怖の度合いを一層強め、行動に対する適応心を次第に失せてくる。Catherine と異なり Henry は、事実の実相を感知しては

いるが、その掌握の一步手前で踏みとどまり、究明・言明の思考作用を中断する。いわば Catherine と Rinaldi の中間に位置する。したがって思考の中断が Henry に繁出するのうなづける。その停止は、現実の暗部を根本的に解明せず、また死が背後から迫ってくるにまかせるため、特に Henry は思考作用の中断をたえず持つ。

この作の特質は、究極的誹謗や真相の掌握を忌避する第三範疇の思考作用の停止が、Henry に頻繁にあらわれ、しかもこの範疇はごく自然に第四範疇に移行することにある。即ち、忍耐の限度を越えて苦悩する際、その煩悶を一時的に止め、狂気を忌避する安全弁ともいえる思考作用の停止となり、生へのものがきにも似た逃亡という行動と同時に、つかのまの幸福を覚える行動—飲・食・眠—へと拡散することである。

次に Hemingway の各時代を代表する他の3作品と比較したい。

初期短編の一つ *Killers* (1927) をまず俎上にのせよう。その作中で Ole Andreson を二人のギャングが付け狙う。彼等の殺害の意図を小耳にはさんだ Nick は、こっそり Andreson のアパートへ行き、知らせる。Andreson はその情報にもたじろかず、逃亡もせず、警察への通報にも無関心で、ただ言葉少なに壁に向い、死を待ち受けている。打ち沈んで立ち帰った Nick は、George と会話を交じえる。

"I'm going to get out of this town," Nick said.

"Yes," said George. "That's a good thing to do."

"I can't stand to think about him waiting in the room and knowing he's going to get it. It's too damned awful."

"Well," said George, "you better not think about it."¹⁷

George が傍らから援助していることと相俟って、Nick の思考作用の停止と逃亡が、ここに認められる。生命の危険に身をさらされているのは、Nick でなく Andreson であり、彼自身の死の影に浸蝕されるには Nick は若すぎるといえようが、彼は元ボクサーの身の上を慮ると忍耐できず、町から逃亡すること以外に自身を救う道はないと気付く。死の影—狂気の危惧—思考作用の停止—逃亡が二人の人間に分離している点がこの小説の特色だが、これらは後の作では一人に体现されてくる。*Killers* では第三範疇(即ち一人の殺し屋がべらべら殺害の真相をしゃべり、他方の殺人者はその言明を忌避させるといったもの)ならびに第四範疇の停止が数多いが、死の直接的な暗い影と思考作用の停止が、二人の人間に分離して存在している点、およびその停止と逃亡が *A Farewell to Arms* の Henry に比して、あまりにも直接的に接合している点で、いかにも若い Nick にふさわしいとはいえるが、そこに物足らなさを覚えるのは否めない。

A Farewell to Arms より10年以上経過して *For Whom the Bell Tolls* (1940) が出版された。この作の思考停止ははるかに進展を見せている。橋梁爆破の使命を負った Jordan にとって、緊張が迫ってくると、余分なこと一切は考察の対象とはならない。

He had only one thing to do and that was what he should think about and he must think

it out clearly and take everything as it came along, and not worry. To worry was as bad as to be afraid. It simply made things more difficult.¹⁸

この種の言明が何度か繰り返される。次の引用もこの一つの例である。

You have only one thing to do and you must do it. Only one thing, hell, he thought. If it were one thing it was easy. Stop worrying, you windy bastard, he said to himself. Think about something else.¹⁹

彼はおびえず現状を的確に把握し、ただ橋梁爆破に向ってひたすら行動を起すのみである。恐怖や狂気の回避と拡散化された行動が思考停止の第四範疇に属したが、この作品にあつてはそれが目標と定めた行動に向かう。即ち、*A Farewell to Arms* では飲・食・眠の一種の行動に拡散し、それらは見据えられた一つの目的ではなく、拡散した気晴し、一時の幸福感の追求にすぎなかったが、*For whom the Bell Tolls* をもって始めて、思考の中止は単一の目標を達成するための行動を生誕させる。これを第五範疇と呼称しよう。Jordan は、“You are the instruments to do your duty.”²⁰ と自ら判断し、他の一切を抛ち全神経を行動に集中する。思考にのめりこもうとすると、「おれは思想家ではない。ただ橋を破壊すればよい」と自らたしなめる。その理由は“there is a bridge and that bridge can be the point on which the future of the human race can turn.”²¹ であり、また“I am for the Republic ... and the Republic is the bridge.”²² であり、人間は設定した目的を遂行するための道具であり、目的実行のためには“Neither you nor this old man is anything.”²³ にすぎないと考えているからである。作者は熟慮に熟慮を重ねた末目的を設定している。登場人物たちがこの目的を達成するためには、非情な可酷な現実を数多く飛び越えねばならないが、彼等はしゃにむに突進する。Jordan は、Henry の如く目的の不確かな行動ではなく、生命を代償にしてまで、目的を完遂するための行動をする。ピーンと張りきった神経を緩和せんため、“Don't worry”等の随伴が惹起する思考の中断のみられるが、直ちにそれも第五範疇に移行するのが主人公 Jordan の特色である。彼は最後に敵弾に仆れるが、仲間とともに逃亡する素振りもみせない。最後まで踏み止まり敵を迎えうつ。恋人 Maria は彼の傍で戦死の覚悟を決めるが、“You are me now.”、“We both go in thee.”、“The me in thee.”²⁴ と Jordan は彼女を退去させる。Jordan 自身にとって逃亡も出口も塞がれている。これまで思考停止は逃亡のテーマと結合していたが、この作品でその停止は、最後まで見据えられた苛酷な現実と、意識的に設定された確たる行動が両者を接合している。

The Old Man and the Sea (1952) に至ると、この特質は一層の展開をみる。老人はマーリンを釣り上げようと試みるが、その大魚は一切姿を見せない。やがて老人は堪えがたくなる。するとこのような叙述がなされる。

Then he rested against the bow. He rested sitting on the un-stepped mast and sail and tried not to think but only to endure.²⁵

彼は苦闘し、耐え忍ぶ。また“*But I will show him what a man can do and what a man endures.*”²⁶ と一途に堅忍する。“Don't worry”等の随伴により生起した緊張緩和の思考中止に留まらず、忍耐

の極限という負のバネが最大限に働き、目標を完遂する行為へと、即ち第五範疇にそれは移行する。第四は第五の思考中止に移行する前段階である。老人は心の動揺をしずめるものを想起しないわけではない。例えばラジオがあれば素敵だろうと思う。すると直ちに“Think of what you are doing. You must do nothing stupid.”²⁷と自ら戒め、目標たる行動に全身・全霊を集中させる。

老人は少年がいれば助かると思うが、現実にはそれも叶わない。極限状況におかれた老人は、一時的にしる苦悶を霧散させようと図るが、その思考を中断させて、大魚を釣り上げる行動のみに全身を集中させる。この作では第四は必ず第五範疇へ移行する。

老人はマーリンを釣り上げて安堵したのもつかのま、鯨が来襲してくるが、いかに悪化した状況に投げこまれても、決して争闘を放棄しない。出口は閉塞されており、彼は定めた唯一の行動に全力を傾けざるを得ない。

この作の今一つの特徴は、non-verbal levelの思考停止が数多くみられることでもある。A Farewell to Armsで論究した筆の押えと場面の転換ばかりでなく、堅固な筈の物自体のふくらみによるものでもある。例えば思考のフィルタにかけて分離させられ、練りあげられた「老人」「海」「マーリン」は、各時点で余計な説明は附加されないが、やがて個々の輪郭が膨れ上がって、それが多元な意味を持ち始めると、途端に場面が転換し、固有の物自体に立ち還る。しかしそれは度々繰り返され、ついに象徴的な様相を歴然と呈するに至る。勿論 Killers や A Farewell to Armsにおいて、「壁」や「雨」等も類似の効果を担っており、いわば「客観的相関物」²⁸は Hemingway の初期の短編以来の特色であるが、この作ではそれら以外にも「鯨」「少年」「観光客」「ライオン」と多種にわたり、いや力強い素描は多かれ少なかれ、ことごとくふくらみを担っている。

したがってこの作に特有な verbal level は、non-verbal level の思考停止と相俟って、The Old Man and the Sea を簡勁かつ象徴的なものに深めている。

なお、思考作用の停止の全体的意義については、後述したい。

II

Hemingway は先輩作家の特質と彼自身の資質をフルに活用したが、これは思考作用の中止に関しても例外ではない。両要素を考察しながら、作品をも睨み合わせつつ、作品外の視点から思考作用の中止を浮彫りにするとどうなるだろうか。

Hemingway は“all modern American literature comes from one book by Mark Twain called *Huckleberry Finn*.”²⁹と *Huckleberry Finn* を過大と思えるほど評価している。この熱っぽい肩入れから彼が学びとったものは何か、それを模索したい。

無論彼に影響を与えた人は、Sherwood Anderson, Gertrude Stein, The Kansas City Star の記者等々と多彩な顔ぶれだが、またこれらの人達はそれぞれの時点において、看過しがたい痕跡を彼の心に刻みつけたであろうが、思考作用の中止の観点からいえば、彼等は所詮枝や葉にすぎない。根幹となって彼の文学的営為を形成し続けてきたものは、Mark Twain の *Huckleberry Finn* である。

Huckleberry Finn (1884) には、Hemingway 文学の特色として知られるようになった非情のリアリズムの存在を、まず指摘できる。例えば飲んだくれの Boggs が Colonel Sherburn に殺される時、殺害寸前の Boggs の苦悩の表情、死体に悲痛な叫びをあげながら取り纏る彼の娘、興味しんし

んと周囲を取り巻く群集の表情を、Huck は感情の動きを微塵も見せず、またセンチメンタルに陥ることなく、目もそらさず活写している。³⁰ Huck はそれ以上深く考えようとしな。思考によって絡みこんでくる社会的夾雑物が、いかに人間の裸の感覚と感受性を強烈に麻痺させ、人間を安易な妥協に追い込むかを、Huck 自身認知しているからである。

非情のリアリズムについて、Hemingway と *Huckleberry Finn* の類似の指摘は目新しいものではなく、今さらとりたてていうほどのことはない。問題は非情のリアリズムとセットされた思考作用の停止も *Huckleberry Finn* に垣間見られ、それが Hemingway に多大な影響を与え、人目には思わぬ耽溺ぶりと映った点である。その思考作用の停止の好例をあげ、論究したい。

第十八章で Grangeford 家と Shepherdson 家の宿怨のため、追いつめられた少年 Buck は、木に登っていた Huck の眼前で射殺される。その際 Huck は “It made me so sick I most fell out of the tree, I ain’t a-going to tell *all* that happened—it would make me sick again if I was to do that.”³¹ と、思考不能の状態となり、非情に描写する彼にしてはめずらしく、真実の活写をしばし保留する。また次の如き好例もみられる。

途中から Huck と Jim の筏に乗り込んできた悪漢 king と duke は、ついに奴隷競売という冷酷な手段を考えつく。彼等は泣きくずれる黒人の娘たちを地獄の Memphis へと売りとばすが、その光景を見て Huck は、

I thought them poor girls and them niggers would break their hearts for grief; they cried around each other, and took on so it most made me down sick to see it.³²

と述べ、ここでも “sick” となり、彼の思考のメカニズムは停止する。この種の例はまだみられる。

king と duke の二人の悪漢も、さまざまな悪事を働いた後、ついに正体を見破られ、捕えられ、タールと羽毛を身体中に塗りたくられ、リンチにかけられて、殺される。その際にもやはり Huck は、

Well, it made me sick to see it. ... It was a dreadful thing to see. Human beings *can* be awful cruel to one another.³³

と溢れ出る感情に圧倒されて、余儀なく思考の停止をする。

このように非情のリアリズムは、その代償として神経がそれに堪えきれない時、思考の停止を招来し、それによって落差を埋め、もとの非情の状態に還帰し、やがて行動の世界に至ることである。例えば既述した Buck の殺害に対して、“get out of that awful country”³⁴ と Huck は逃避を願う。逃避も一種の生を求める行動ではあるが、消極的側面を持っている。Huck は積極的な行動もする。Huck は思考に行き詰って、Miss Watson に手紙をしたためる。³⁵ その行為によって彼の挫折感は霧散する。思考では解決し得ぬ問題も行動によって永解する。

これらの要素を勘案すると、Hemingway は *Huckleberry Finn* の非情のリアリズムによって影響を受けたばかりでなく、溢れ出る感情、思考作用の停止および行動というパターン——彼の創作の根本的要因——まで、自からの血肉として取り込んでいることがわかる。

次に Hemingway の資質について考察を加えよう。少年時代の Hemingway の資質は、“To a remarkable degree, the child was father to the man : many traits of Ernest’s boyish character held on with only slight modifications well into his adult life.”³⁶ の如く受け継がれ、彼は成人に

達している。また彼の生への関わり方と作品は驚くほどの一致を見せている。両者の極めて強い一体化こそ Hemingway 文学の特徴といえようが、同時に作品ではぼやけている輪郭、あるいは故意に彼が隠蔽しようとした面を、彼の伝記的事実を探ることにより、浮かび上がらせたい。

Hemingway の父親は、Ernest が幼少の頃より、自然を知り愛する性癖を植えつけたといわれる。父親は戸外で火を起し、鳥や魚を料理し、また斧を使うすべを教えた。また銃や釣具を注意深く取扱う方法も示した。³⁷ また他の野外生活の仕方 “flushing jacksnipe on the prairies ; walking through dead grass or harvest fields where corn stood in shocks ; passing by grist or ... mills or tracking lumber dams.”³⁸ を身をもって教示した。

“fraid a noting”³⁹ という maxim は 3 才の彼が口にしたものであり、また父が彼にたたきこんだ勇気と忍耐力を Ernest は終生持ち続けた。その一つの例を見たい。

Hemingway が野営をしていた時、一団のギャングが襲ってきた。一味はテントをはったロープを切り、持ち物を森へと奪い去ろうとした。Hemingway は怯まず手近かにあった斧を取り上げ、彼等の一人に向かって投げた。鼻をかすめて、かろうじてそれは外れた。実際ギャング団は友人が仕組んだ遊びの集団とわかって、彼はホット胸をなでおろす一幕もあった。⁴⁰ Hemingway 17 才の出来事である。

彼は各種のスポーツにも関心を持った。5 フィート 4 インチとフットボール選手としては小柄であったが、フットボールに興味を示す。しかしどちらかというと、ボクシングなどの個人プレイのスポーツに、より熱中した。また雪解時の急流ではカヌー漕ぎに情熱をもやし、Illinois River から Starved Rock State Park へと、5 日間かけて、漕ぎ下った。この種のスポーツは一種の争闘であり、そこから生まれる緊迫感にえもいれぬ喜びを見出したからである。急流での鱒釣りに熱中した彼は、“It was great romantic fun,” Ernest thought, “fighting them in the dark in the deep sunlit river.”⁴¹ とその間の事情を語っている。この闘争と緊迫感は、さらに刺激の強いスポーツへ、たえず危険を伴う死と隣り合わせの大物釣や狩猟、闘牛などのスポーツへと、彼を駆りたてた。死が彼を魅了したといってよい。

彼は成人して新聞記者としてスタートした時点でも、すぐ現場に馳せ参じ、そこから report するが、⁴² その仕事にも飽き足らなく思い、義勇兵として戦場に参加し、死の危険の多い前線へ自ら志願し、再三ならず九死に一生を得た。死が彼にとりつき、もはや離れていないことがわかる。

彼の生得の資質に根ざしているこれらの特色は、Hemingway の人生と同時に小説の中核を形成している。この資質は血肉を通じて父から委譲され、また父の感化によって更に発展していったものである。彼がものした作品でも度々直接的に父を描写していることから、この間の事情はうかがえよう。それに比して作品で「母」を見出すことは極めて困難といわざるをえない。「母のイメージ」こそ、Hemingway の作品を、また思考作用の停止の秘密を開く重大な鍵であると思われる。

彼の母は音楽学校を卒業し、一時はニューヨークの Madison Square Garden でプロのオペラ歌手としてデビューする手筈になっていたが、舞台の強い光線に彼女の視力は耐えられず、余儀なくその道を放棄した。⁴³ 結婚して 4 人の子の母親となった後も、彼女は芸術生活に立ち帰ることを夢想していた。⁴⁴ その母親の芸術家気質を受けつぎ、Hemingway は音楽の道ではないが、絵画にも抜群の鑑識眼を備えるようになる。⁴⁵ また自然の愛好にしても、大ぶりの父とは異なり、彼は小さな貝や小鳥の観察、顕微鏡で丹念に物を観察する態度を持つ。Baker によれば、“Ernest ... took after his mother than his father.”⁴⁶ であり、母親の目に映った Ernest は

As soon as he had learned to stop "fighting himself and everybody else," said Grace, he would turn into a "fine man."⁴⁷

であった。「fighting himself and everybody else」は彼の作品に登場するさまざまな人々の生の姿勢、換言すれば「父のイメージ」であるとすれば、格闘「停止」の後顕在化する姿、作品の陰にひそかに息づいている「fine man」は、鋭敏で、感受性が強く、また心やさしい Ernest ではなからうか。しゃくりあげて泣く凶は Hemingway からは想像もできないが、He was also very tender-hearted, "crying bitterly over the death of a fly he had tried to receive on sugar and water."⁴⁸と母 Grace のみが語りえた彼の仁愛と柔弱は、彼自身の性質であり、また Ernest の作品の「母のイメージ」ではなからうか。では彼は小説の中で「母のイメージ」を容易に示さず、また無論殆んどといってよいほど母を描かず、ひたすら非知性的、非感性的人間のみを追い求めているが、これはどう説明すべきか。

よく注意するならば、彼等の行動もその基盤に、感覚があり、それこそ「母のイメージ」を解明する鍵が存在していると思われる。勿論いかに冷酷無比な人といえども、感覚・感情は持っている。しかし右顧左眄している人々を行動に駆りたてる力は、一般的にいて、彼等の主義主張、善悪の判断、直感等複数の要素であるのに比べて、Hemingway の行動原理はただ一つ、感覚・感情であるということになると、尋常でないことにわれわれは気がつく筈である。彼は善悪を判断する際にも、"Morals are what you feel good after."⁴⁹と感覚がその基盤にある。しかし作品では、無表情な客観物と粗野な行動にみち溢れており、感覚・感情は容易にその姿を見せないから、一層厄介である。これらの取扱いには心する必要がある。

Hemingway は素材を、鋭敏で、繊細で洗練された感覚という濾過器にかけてこし、感覚が濾過しないものを不純物として取り除き、客観物と行動的狀況という殺風景なまでに非情の純粋液でみだしている。その純粋液こそ、特に non-verbal な思考中止の基盤である。われわれは濾過された純粋液を問題にするが、その濾過器の存在には注意を向けていない。その存在こそ「母のイメージ」ではなからうか。

また作中で人々が死にさらされれば、恐怖という感覚もあふれてくる。この感覚も "fraid a nothing" という「父のイメージ」と異なり、「母のイメージ」であり、またこれこそ verbal level の思考作用中止の前提である。彼はこの「母のイメージ」をも海面下に沈めようとする。二度にわたって「母のイメージ」を作品の前面から拒否したわけである。彼が頑固なまでに拒否した「母のイメージ」こそ、死に取り憑かれ、自らも父と同じく銃による自殺をし、「父のイメージ」一辺倒と思われる作品の裏面に潜むものである。したがってわれわれは、海面下をも取り入れることによって、氷山の全貌を把握できる如く、「父母のイメージ」を結婚させることによって、Hemingway 文学の正しいありようを、また思考作用の停止を認知できるといえよう。

III

Hemingway の作品の特質は、既に述べたが、死と隣り合わせに生きた人々が、死がもたらす不安・緊迫感の中で、抵抗し戦ってきたこと、それを基盤として思考作用の停止と余分な説明の排除、簡潔性が生まれていることである。この特質で全ての作品は貫かれているが、なかには例外もないわけではない。「余分な説明」と「思考作用の横溢」および「死への安住」のみられる作品を取り上げ、

それらの要素は作品に溶けこんでいるか、それとも反目し、浮き上って作品を失敗とさせているかを考え、従来とは逆な面から、思考作用の停止が Hemingway にとって必要不可欠の要素であることを証明したい。

「思考」が充満している代表的作品は *To Have and Have Not* (1937) であろう。その顕著な現れは、Joyce ばりの内的独自の形式を踏む「第十章」と「第二十六章」といえる。第十章で主人公 Harry は “got a family and ... got to eat and feed them.”⁵⁰ のため、密輸や殺人を犯し、なお次の悪事を練っている。その際彼は長い独自の形式をとる。次に Harry は死去し、彼の妻 Marie と娘三人は後に残される。父の死を慨嘆する娘に、「『おしゃべりはおよし』マリイは言った。『後生だからおしゃべりはよしとくれ』」⁵¹と命じ、思考作用を打ち切りながらも、Marie は夫への追懐と生活の不安を胸にこめて、最後の全章にわたり、自らの内面で思考し、それを独自の形式で語る。

この小説には、密入国、密輸入、裏切り、射ち合い、銀行強盗、殺害、革命といった行動的事件にこと欠かない。いや他作と比しても圧倒的に多く、スリラーまがいの要件を具備している。そういう死と対峙した、緊迫した過度の行動的事件と同時に、章全体におよぶ「思考」や余分な説明が存在している。そしてこの作品の大部分をしめるのは、やはり hard-boiled realism であり、あの独特の単綴語と単純な接続詞からなる文である。作品全体としてみるならば、切羽詰った行動的事件と冗漫に流れる思考の充満と独特な乾いた文体がうまく絡みあっている、従ってこの観点からも、*To Have and Have Not* は失敗作と断定されざるをえない。

Joyce 流の意識の流れ、内的独白は、Hemingway の作品にあっては、不釣合である。ともすれば全体を冗漫とし、彼の特色たる simplicity も欠如させる。説明的内面描写は枝となり、種々の色あいの葉となり文を飾り立てるため、Hemingway はそれを忌避し、幹そのものを描写したいと念じ、「散文は建築だ。室内装飾ではない。パロークは過去だ」⁵²と断じたことがあったが、その呪縛から跳き出るこの種の試みもした。しかし緊迫感、行動的事件および独特な文体を捨てない限り、余分な説明や思考作用の充満を同時に取り入れることの至難性を、彼は認識したのではなからうか。

他のもう一つの失敗作 *Across the River and into the Trees* (1950) をも取り上げてみよう。この作品は他の作と甚だしく異なり、「死への安住」を持ち、したがって思考作用の中止を持たない。

Hemingway はたえず死に魅せられており、その不安、緊迫感の中で抵抗し、戦い、生命力にみちみち溢れた人物を創出してきた。その逆の例がこの作の主人公 Cantwell 大佐である。

大佐は第一次・第二次の両大戦に参加し、特に第二次大戦では彼の率いる連隊をほとんど全滅させたかどで、降格させられた苦い経験をなめている。私生活においては、三度の結婚に失敗し、今や娘ほどの年の異なる 19 才の伯爵令嬢 Renata に熱を上げている。今大佐は鴨打ちに来ており、それ以外すべて回想の形式で語られ、最後近くで再び現実となる。大佐は Trieste へ帰る車中で、心臓発作のため急死するのが、この作の荒筋である。

Hemingway の小説で、狩猟といえば、ライオンや犀等というハンターを死の危険に陥れるものときまっており、鴨とはいかにも異常な感を与える。少なくとも生の緊迫感のなかで行動する状況を惹起しないが、思考作用の中止を反証する好材料が最終章に見出される。大佐は自問自答する。

So what the hell do you have to worry about, boy ?

I hope you're not the type of jerk who worries about what happens to him where there's

nothing to be done. Let's be certainly hope not.⁵³

既に見てきたように、“Worry about”⁵⁴ は思考停止の直前にきた言葉であるが、この作の主人公は、思い惑うタイプの人間ではないと自ら断定し、しかもその境地に十分に安堵している。無論その直後彼は思考を停止する必要はない。将軍 Jackson が死の直前に言ったという “Order A.P.Hill to prepare for action....No, no, let us cross over the river and rest under the shade of the trees.”⁵⁵ にあやかり、彼も死の直前には行動も闘争もせず、車のバックシートにもたれ、「死」に安住し、溶けこむように死の住人となる。

主人公が死の境地に安住し、何らなすところを知らずに至ると、作そのものもハリと緊迫感を失くし、その作は失敗と墮してしまっている。また無論ここでは思考作用の停止は必要とされていない。

これらの失敗作を勘案すれば、Hemingway に特有な要素は、苛酷な死とその状況下で観念をオブジェ化し、ひたすら行動に向かうこと、これらに完全に合致した独特な文体とこれらと密接に結合した思考作用の停止であることを、われわれは認知せざるを得ない。余分な要素は排除され、純化され、その結果彼の特異な文体が生まれる、と同時に作品をものするまでに至る彼の思考作用も、作中での思考作用の停止も、彼が信奉している世界を純化する役目を担っていることも、理解せざるを得ない。なぜなら、無論彼の「思考」は上に掲げた状況を純化して描きこむことにあったが、その「中止」も、これまでとは異種の世界を想像し、行動しかねまじき人々を、単一の世界に限定させ（第五範疇の思考作用の中止）、または「狂気の安全弁」としてその落差を埋め、もとの世界に人々を復帰させ（第四範疇）、真相を忌避するなどしてもとの交友関係を復元させ（第三）、その世界をたえず純化する働きを担っているからである。第一範疇は言わずもかなである。

既に述べた Hemingway に特有なすべての要素は、密接不可分であり、単独に切り離されることはできない。彼が切りとり異種な世界を構築しようと企図すれば、その試みは失敗と帰す。彼が完成したそれらの要素は一枚岩の如く揺かず、純化以外の種々の挑戦を撥ね付けてきた。そこにこそ彼一人がその基盤に立脚し構築できた独特な世界があり、逆に一歩も踏み外せない世界のため、そこに包含された彼の限界もある。Hemingway の視点は、世界は、その長所とほうらはらに、狭小化されざるを得ない。同時代の作家 Faulkner を例にとると、彼の作品には、ゴシック・ロマンス、ギリシア悲劇、キリスト教的アレゴリとさまざまな要素が存在し、なおかつそれらは作品全体の有機性を不思議と壊さない。Faulkner は、物を入れるいわば大きい容器を持っており、その容器は形があつて、時には形がない。そういうしたたかな柔軟性を彼は持っている。この点に関しては、Hemingway と Faulkner はまったく異質である。

では Hemingway に Faulkner なみの大にして融通無碍の容器を持たせることが肝要であつたかという、必ずしもそうではなく、その容認は彼の全存在の否定につながりまじきものである。Hemingway の容器に、既述した密接不可分な要素が盛られ、その整然さが尊ばれる——逆に一つの欠如も彼の作品を駄作と化すというジレンマをそれは持つ。彼は各要素の存在という基盤に立ち、多少の増減に主な関心を示し、新しい要素の盛入れを認めず、いわば彼の容器の蓋をぴったり閉ざしていた。その入れ物は単なる床間を飾る置き物ではなく、彼の生来の資質を材料として作り出された生存そのものであつた。生存と大きくかけ離れた創作は、彼には至難であつた。Hemingway はそれを堅持し、ますます磨き上げて純化・完成させ、その致達点を *The Old Man and the Sea*

に持つ。ために彼は世界的文豪としての名声をほしいままとした時期を持った。

この論考では、入れ物の堅持は当然の前提としてきたが、その枠内でも現在の Hemingway 像以上の発展の萌を示した作品がみられないかという点、必ずしもそうではない。純一でなく拡散化された行動をもつ *A Farewell to Arms* がそれである。思考作用の中止の観点に立てば、それは過渡期の作品であるが、いわば到達点とは異なる分岐点の可能性も孕んでいた。この方向に Hemingway がひた走って行けば、*The Old Man and the Sea* とは異なり、現在とは違った評価を享受していたかもしれない。

思考作用の停止は彼の独特な世界を構築し、世界文学史上に彼自身の独自の地位をしるしたと同時に、他の要素の介入を容認せず、そこから起因する純一性を、弱点ともしいいうるならば弱点を、晒すことにもなった。いわばこのジレンマを包摂しているのを覚悟して、Hemingway はそれを根本から改めることなく、また敗者となるを恐れず、無器用なまでにストイックに、また痛ましいほど倫理的につき進んでいったが、それが彼の生涯でありまた彼の文学であったともいえよう。

注

- 1 Ernest Hemingway, *A Farewell to Arms* (New York : Scribner's, 1929) , p.61.
- 2 Ibid., p.61.
- 3 Ibid., p.167.
- 4 Ibid., p.27.
- 5 論理学では、思考作用の形成を概念、判断および推理の三つとする。速水滉『論理学』(岩波書店、1916)、32頁参照。
- 6 *A Farewell to Arms*, p.231.
- 7 Ibid., p.279.
- 8 Ibid., pp.327—28.
- 9 Ibid., p.139.
- 10 Ibid., p.233.
- 11 Ibid., p.154.
- 12 Ibid., p.168.
- 13 Ibid., p.22.
- 14 Ibid., p.18.
- 15 Ibid., p.170.
- 16 Ibid., p.170.
- 17 Ernest Hemingway. "The Killers" in *Men Without Women* (New York : Scribner's, 1927), pp.95—96.
- 18 Ernest Hemingway, *For Whom the Bell Tolls* (1940 ; rpt. Middlesex : Penguin Books, 1964), p.12.
- 19 Ibid. , p.45
- 20 Ibid. , p.45.
- 21 Ibid. , p.45.
- 22 Ibid. , p.54.
- 23 Ibid. , p.45.
- 24 Ibid. , pp.436—37.

- 25 Ernest Hemingway. *The Old Man and the Sea* (New York :Scribner's, 1952), p.46.
- 26 Ibid. , p.66.
- 27 Ibid. , p.48.
- 28 ウィリヤム・オーコナー編『現代小説のすがた』(南雲堂, 1961) 所載のレイ・ウェスト「アーネスト・ヘミングウェイ—感受性の失敗」, 139頁参照。
- 29 Lionel Trilling, "Huckleberry Finn," in *The Liberal Imagination* (London :Mercury Books, 1950), p. 117.
- 30 Mark Twain, *Tom Sawyer and Huckleberry Finn* (rpt. New York : The Modern Library, 1922), pp, 418 ff.
- 31 Ibid. , p.387. (引用文中のイタリックスは原文のまま)
- 32 Ibid.,pp.464—65.
- 33 Ibid., p.520. (引用文中のイタリックスは原文のまま)
- 34 Ibid., P.388.
- 35 Ibid., Chap.xxxix.
- 36 Carlos Baker, *Ernest Hemingway : A Life Story* (New York : Scribner's, 1969), p.17.
- 37 Ibid., p.9.
- 38 Ibid., p.9.
- 39 Ibid., p.5.
- 40 Ibid., p.28.
- 41 Ibid., P.24
- 42 佐伯彰一編『ヘミングウェイ』(20世紀英米文学案内, 研究社, 1966), 26頁。
- 43 Baker, p.2.
- 44 Ibid., p.7.
- 45 Ibid., p.17.
- 46 Ibid., p.62.
- 47 Ibid.,p.62.
- 48 Ibid., p.5.
- 49 Ray West, "A Farewell to Arms," in *Ernest Hemingway : Critiques of Four Major Novels*, ed, Carlos Baker (New York : Scribner's, 1962), p.30.
- 50 Ernest Hemingway, *To Have and Have Not* (1937 ; rpt, New York :Grosset & Dunlop, 1944), p.49.
- 51 Ibid., p.255
- 52 志賀勝編,『ヘミングウェイ研究』(英宝社, 1954), 88頁。
- 53 Ernest Hemingway, *Across the River and into the Trees* (1950 ; rpt, Middlesex, Penguin Books, 1966), p.236.
- 54 Cf. *A Farewell to Arms* , pp.115, 138, 233, etc.
- 55 *Across the River and into the Trees*, p.236.

(昭和54年9月14日受理)